

多義語派生義の学習法に関する考察：学習活動・習熟度・透明性の観点から韓国人日本語学習者を対象にして

麻生，迪子

<https://doi.org/10.15017/1440999>

出版情報：九州大学，2013，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

本論文の要旨

本論文は、韓国人日本語学習者を対象に多義語派生義の学習法にかかわる問題を学習者の習熟度、学習語彙の特性の観点から明らかにしたものである。第1章では、本論文の目的と対象および構成について述べた。

第2章では、本論文の理論的枠組みについて述べた。本論文は、認知意味論の理論的枠組みと記憶研究の理論的枠組みに基づく。認知言語学の応用研究として、多義語習得研究と多義語学習法研究について概観した。多義語習得研究では、中心義（プロトタイプの意味）は日本語学習者に習得されやすいが、派生義（非プロトタイプの意味）は習得されにくいことが先行研究で示された。多義語学習研究では、派生義の効果的な学習法についての詳細な報告はない。また、記憶研究の理論的枠組みとして、処理水準仮説について概観した。処理水準仮説では、意味について考える活動は精緻化活動とも呼ばれ、記憶保持をもたらすという。処理水準仮説を第二言語（L2）語彙学習に応用した研究は数多く報告されている。しかし、多義語の未知の派生義を取り扱ったものはない。また、意図的語彙学習研究を概観したところ、対象語の特性（例えば透明性）や学習者の習熟度が学習成績にどのような影響を与えるのか、十分に検討されたものはない。

以上の先行研究を概観した結果、第3章では以下の3つの研究課題を設定し、操作的定義についても記述した。

外国語としての日本語（JFL）環境での韓国人日本語学習者の多義語派生義学習において、

- ①どのような学習活動が有効なのか。
- ②日本語の習熟度によって、学習効果がどのように現れるのか。
- ③語の透明性によって、学習効果はどのように変わるのだろうか。

第4章では、研究課題①を解明するために、韓国人日本語学習者60名を対象に、次の3つの学習活動の効果を比較検討した。1つは、意味推測に基づく精緻化活動群である。2つ目の活動群は、精緻化活動ではないが、調査協力者に実験文と派生義の対訳を与えて、学習させる意味付与学習群である。3つ目の活動群は、意味について検討するのを妨げる目的で形式に焦点を置いた形式学習群である。比較した結果、事後テストと事前テストの間には、有意な差が認められた。しかし、学習活動間には有意な差が認められなかったが、意味付与学習群、推測活動群、形式学習群という順で、学習成績がよかった。また、語によって学習成績に差があることも認められた。実験の結果、研究課題①の答えとして、派生義の学習においても、意味について検討する精緻化活動が有効であることが示された。ただし、非精緻化活動であるはずの意味付与学習活動が有効であった理由は不明のままであった。

第5章では、意味付与学習が有効であった原因を探り、かつ、語の透明性を明らかにするために、調査を行った。調査では、派生義を含んだ実験文とその意味を与え、派生義の意味がどれほど理解しやすいのかを4段階で測定した。調査協力者である48名の韓国人日本語

学習者を日本語習熟度によって、3群に分けた。調査協力者の評定を習熟度要因で1要因分散分析を行ったところ、習熟度による有意な差は認められなかった。そこで、調査協力者のうち17名にフォローアップインタビューを行い、調査協力者の解答をKJ法で分析した。派生義の理解ストラテジーについて検討したところ、上位群になるにつれ、語彙知識を利用したストラテジーが用いられていることが示唆された。これは、日本語習熟度が向上するにつれて、語彙知識が豊富になるためであると考えられる。

第6章では、研究課題②と研究課題③を明らかにするために実験を行い、連語について検討する連語学習法と意味について検討する意味付与学習法を比較考察した。対象語は9語で、調査協力者は48名の韓国人日本語学習者である。学習活動の異なる2つの群を設定し、これらの学習群を調査協力者の日本語習熟度によって上位群と中位群に分けた。テスト要因、習熟度要因、学習活動要因の3要因分散分析を行ったところ、テスト要因については主効果が認められたが、残る2つの要因については、主効果が認められなかった。さらに、1次の交互作用、2次の交互作用も認められなかった。学習成績から、連語学習群と意味付与学習群の間には差がないことが示された。また、学習成績にカイ二乗検定を実施したところ、中位群は各語において意味付与学習群と連語学習群は同等の学習量であったのに対して、上位群では1語を除き全ての語が同等の学習量であった。さらに、第5章で明らかにした透明性値によって対象語を2つに分け、透明性要因と習熟度要因で2要因分散分析をおこなったところ、透明性、習熟度ともに主効果が認められなかった。また、交互作用も認められなかった。さらに、習熟度別にクラスター分析を行ったところ、中位群では2つのグループに分かれ、上位群では3つのグループに分かれた。考察した結果、研究課題②の答えとして、習熟度によって学習効果に違いはなかった。ただし、習熟度が高まると、学習活動によっては、語の特性の影響が生じ、学習効果の現れ方が異なる、ということを明らかにした。そして、研究課題③の答えとして、透明性の高低は学習効果を予測するものではないことを明らかにした。その理由として、習熟度に応じて、語の知識量が異なるため、透明性の高低とは異なる要因で学習量が決定していくことが示された。

第7章では、本論文の要約を行うとともに、研究の意義について述べた。最後に本研究の成果を元にした教室活動例について記述し、本研究の限界点についても記述した。